

コミュニケーションにおける マルチモーダルな行為とその意識 —初対面の3人会話における対人印象、 人間関係の構築について—

柳 東汶

要 旨

本稿は、日本語話者3人の会話におけるマルチモーダルな行為とその行為に関する意識、また、マルチモーダルな行為を通じて形成される対人印象と人間関係に関する意識の間の関係について分析、考察したものである。分析した結果、対人印象に関する意識が語られた行為に話題提示や質問、話の内容、視線、うなずき、ジェスチャー、発話リズム、発話速度、姿勢が、語られなかった行為には表情があった。対人印象と人間関係に関して語られた意識から、7点の特徴が見られた。これらより、コミュニケーションのマルチモーダルな行為を振り返り、話し合いながら、互いのマルチモーダルな行為の意識とその根底にあるものを共有する実践の必要性を論じ、コミュニケーション及び対人印象、人間関係の構築におけるマルチモーダルな行為の重要性に気づき、マルチモーダルな行為から他者を深く理解し、自分のコミュニケーションを内省することの重要性を論じた。

キーワード

マルチモーダル 対人印象 人間関係 話し合い 内省

1. はじめに

コミュニケーションは、日本語などの言語だけで行われるのではなく、視線、ジェスチャーのような、言語以外のモードと共にアンサンブルを織り成して成立する。この点を念頭に置くと、日本語教育は、その名の通り、日本語という言語の教育に関する分野ではあるが、言語以外にコミュニケーションを構成するものにも注目し、日本語学習者のコミュニケーションの指導、支援について考え、実践する必要がある。しかし、日本語教育において、マルチモーダルなコミュニケーションの研究は、まだ少ないのが現状である。

本稿では、3人で行われる会話の場面に注目する。初対面である複数の相手と会話を行

い、何らかの対人印象が形成され、友人、恋人などの人間関係を築いていくことは日常において珍しくないが、その流れにおいてどのようにコミュニケーションし、どのような意識を持つか、また、コミュニケーションに参加する者の相互の意識とコミュニケーション行為がどのように影響し合うか、それによって対人印象や人間関係に関する意識はどのように形成されるのか、については明らかになっていない部分が多く、これについて考える必要があると思われる。

2. マルチモーダルの定義

マルチモーダル¹という用語は、研究者によって注目する部分が異なる。例えば、Jewitt (2009) が挙げているように、記号がどのような機能を持つかを考える機能文法に基づいた Multimodal Discourse Analysis (O'Halloran 2004, 2005など)、記号は社会文化において意味を持つと考え、記号と記号を用いる人、その背景になる社会・文化の関係について考えるマルチモーダルな社会記号論 (Kress&Van Leeuwen 2001, クレス 2018など)、コミュニケーションにおける各モードの出現に注目する、マルチモーダルな相互行為分析 (Norris 2004など) などがあり、理工系においても、人工知能、ロボット工学などの分野で、機械によるコミュニケーション行為の数学的な分析を通じた研究などがなされている。

本稿では、複数のモードが複雑に活用され、コミュニケーションが行われることに注目し、いつ、どのような行為が行われるかに注目するという点ではマルチモーダルな相互行為分析の方法を援用しつつ、同時に、コミュニケーションを行う人の意識について論じるために、マルチモーダルな社会記号論の観点を参考にする。マルチモーダルな社会記号論におけるマルチモーダルの定義を見ると、Kress&Van Leeuwen (2001) は、「The use of several semiotic modes in the design of a semiotic product or event, together with the particular way in which these modes are combined」(p.20) と定義している。クレス (2018) は、モードを「社会的に形づくられ、文化的に付与された意味形成のための記号的リソース」(p.133) と定義し、マルチモーダルな社会記号論について「社会記号論の関心は、あらゆる形式における意味に置かれている。意味は、社会的環境や社会的相互関係の中に発生する。それによって、意味の出所、起源、発生源に社会的なるものをかかわらせていく。」(p.89) と述べている。これは、記号における形式と意味が、無の状態から恣意的に決められたのではなく、社会やその社会の文化に影響された人間によって形成されるものである、つまり、記号と人間、及び社会、文化との関係に注目する観点である。これに従って、本稿では、マルチモーダルを「コミュニケーションの参加者が、各々の社会・文化の影響を受けながら形成した記号(形式・意味)を、発話、文章、視線などの様々なモードを通じてメッセージ化し、互いに表現・理解する現象、及びその現象を捉える観点」と規定する。

3. 先行研究

3.1 マルチモーダルな会話の研究

マルチモーダルな会話の研究を検討すると、岡田・柳町（2008）は、理系実験室とボクシングジムのインストラクションの場面における会話から、指導する側と指導される側の間に共通した対象に注意を向ける場合の方が、姿勢や視線などを通じてより円滑にコミュニケーションが行われ、効果的に指導できると論じる。荒川（2011）は、親しい間柄での会話に現れる話し手の指差し行動において、会話の現場にはないが聞き手が知っている事象を指す場合、聞き手を指差すことがあり、省略した主語や目的語に代わることで発話による明示化を避けるネガティブフェイスへの配慮、聞き手と話題を共有していることを示すポジティブフェイスへの配慮、思考を促進する機能があると論じる。石井（2015）は、自然会話のデータベースからパラ言語情報を分析し、氣息音を含む発声、フライ発声、力み発声などといった声質が、発話者の驚き、嫌悪、落胆などの感情や態度の識別に有効であると論じる。岡田他（2016）は、グループディスカッションの場面のデータから人事採用経験者がコミュニケーション能力を評定した結果を統計分析し、マルチモーダルな行為をどのように行うかによってコミュニケーション能力の評価が変わることを明らかにした。

3.2 日本語教育におけるマルチモーダルの研究

日本語教育に関連したマルチモーダルの研究を検討すると、まず、中川・石島（1998）は、一般人と日本語教師が学習者の日本語能力を評価する基準を分析している。共通点としては、文法、語義、表現に注目し、内容、会話運用も評価している点、相違点には、日本語教師は待遇表現を、一般人は非言語行動を重要だとしている点があるといい、また、一般人は会話内容によって文法・語義・表現より音声、非言語行動を重視する場合があるが、日本語教師は常に内容や言語規則を重視する傾向があるという。佐藤（1989）は、技術研修員の日本語研修の中に、お辞儀、うなずき、頭下げ、指の指示などの非言語伝達様式を提示、練習する教育を取り入れた実践を報告しており、その結果、学習者の日本語能力の向上に効果があるという印象を受けたという。福岡（2004）は、聴解教育にあたって非言語行動の情報を学習者に与えることで、学習者が話し手の意図をより把握できるようになり、イントネーションを聞き分ける知覚能力も促進され、音声言語の定着率も上がるという。ザトラウスキー（2001）は、日本語母語話者と非母語話者にビデオを見せ、その内容を母語話者・非母語話者の相手に説明する場面を録画し、あいづち、それに伴う視線、うなずきの回数を統計分析している。母語話者は、発話の途中で相手の視線などの反応をあまり得ようとせず、発話の終わる際に相手の反応を確認しようとする反面、非母語話者は発話の途中でも相手の反応を見ようとするという相違点を明らかにし、このような部分が互いの印象にも影響し得ることを指摘しつつ、あいづち、視線、うなずきの教育が必要であると論じている。原沢（2005）は、学習者に嫌悪感を持たれる日本語教師の非言語行動と、学習者が気にしなかった非言語行動を分類してリスト化し、学習者の評価には地域差（アジアとヨーロッパ）があると述べている。

以上から、次の点について考える必要があると見られる。まず、マルチモーダルな行為

自体を対象とした会話分析、量的分析の研究は行われているが、その行為と深い関係にある行為の送り手・受け手の意識を研究対象とした質的分析のものは相対的に少ない。次に、コミュニケーションにおけるマルチモーダルな行為が対人印象の形成に影響することは明らかになったが、マルチモーダルな行為と対人印象がどのように結びつくかという具体的な部分において、明らかになっていない部分が多い。最後に、マルチモーダルな行為の教育の必要性を論じたり、実践したりしているが、マルチモーダルな行為の教育の利点が強調される中、コミュニケーションや人間関係などに悪く影響する可能性を論じているのは、原沢（2005）だけである。この3点を踏まえ、本稿では、第2章で述べた研究の観点と、上述した研究課題から、(1) 3人会話においてどのようなマルチモーダルな行為が見られ、その行為に関する自他の意識はどのようなものであるか (2) その行為と意識は、対人印象と人間関係の構築に関する意識とどのような関係にあるか、をリサーチクエスションとし（以下、RQ）、そこから、日本語教育において考慮すべき点は何かを考える。

4. 調査

4.1 調査概要

研究に当たり、2段階で調査を行った。調査1は、初対面の日本語話者3人がグループで会話を30分間行う場面をビデオカメラで録画し、3人の間でマルチモーダルな行為がどのように行われるかを観察するものである。調査協力者の情報は表1のようになり、3人会話は二つのグループでそれぞれ行われた。ここで、RQにおいて、様々な会話の場面を観察するために、話のテーマの有無を設定した。グループ1は自由にテーマを決めて会話した反面、グループ2は、筆者が提示した6つのテーマ（1. 血液型と性格は関係あるか、2. AIの発達によって、将来人間の仕事はなくなるか、3. インターネットの発達によって、本は必要なくなるか、4. 人生で一番大事なものは、愛か、金か、5. 人間の理性と本能、どちらがより重要か、6. 人の見た目と内面、どちらがより重要か）で会話をを行った。

表1 調査協力者の情報

グループ	調査協力者	母語	性別
グループ1	A	日本	女
	B	日本	女
	C	韓国	男
グループ2	D	日本	女
	E	韓国	男
	F	ポーランド	女

調査2は、調査1の後のフォローアップ・インタビューである。筆者と調査協力者が一対一で、調査1で録画した映像を調査協力者が見ながら、調査1の際に、自他のマルチモーダルな行為においてどのような意識を持つか、他の調査協力者の対人印象がどのよう

に形成されたか、他の調査協力者と人間関係を構築したいか、を聞いた。筆者が事前に映像を見て準備した質問と、調査協力者が映像を見ながら思い出した部分が主な内容であるが、無意識のうちに行ったマルチモーダルな行為があることを想定し、筆者が目にしたマルチモーダルな行為について特に意識していない場合は、そのまま答えるように依頼した。

4.2 凡例

4.1で述べた録画データを文字化したデータのマルチモーダルな行為の表記は、表2に示した通りである。ただし、会話の内容と混同することを避けるため、文字化の際、上付きの書式で表記する。

表2 マルチモーダルな行為の表記の凡例

。	発話の終了。
、	発話のポーズ。
↑	上昇調のイントネーション。
(0.5)	沈黙。括弧内の時間は秒数を表し、(0.5)は0.5秒間の沈黙を表す。
:	発話を伸ばす。:の数により、一つにあたり一音節の長さを表す。
h	笑う際の呼気。
FN	真顔。
FS	笑顔。
FO	驚く表情。
S=A	視線。S=AはAを見ている、S=↑は上を見ている、のように表す。
B=↑	身体の姿勢。B=↑は前のめりな姿勢、B=↓は後ろに下がる姿勢を表す。
SO	頬杖を突く姿勢。
G	ジェスチャー。
=G	前のジェスチャーに引き続き、別のジェスチャーが連続して現れる。
Gx	ジェスチャーの終了。
N	大きいうなずき。
n	小さいうなずき。

5. 分析

調査した結果、調査協力者のマルチモーダルな行為のうち、対人印象に関する意識が語られた行為に、話題提示や質問、話の内容、視線、うなずき、ジェスチャー、発話リズム、発話速度、姿勢があった。一方、対人印象に関する意識が語られなかった行為には表情があった。5.1では、対人印象に関する意識が語られた行為を分析の対象とし、どの場面でどの行為が現れたかを会話の文字化した資料から分析して、その行為の送り手と受け手がどのような意識を持っていたか、その意識がどのようなものであるかを、インタ

ビュー資料から分析する。5.2では、5.1を参照して、自他のマルチモーダルな行為に関する意識と、そこから形成された対人印象の意識、人間関係に関する意識の関係について、インタビュー資料を用いて分析する。

5.1 マルチモーダルな行為と意識の関係

5.1.1 話題提示と質問

会話が始まり、まず見られたのが話題の提示、話題を提示するための質問であった。グループ1とグループ2の両方の会話において、テーマの有無に関係なく、だれかが質問をすることで話題を提示していることが、以下の2つの会話資料から確認できた。

【会話資料1】

1	A	FS _{S=C} hhhじゃ、 ^G よろしくお願いましませう。S=↓
2	B	FS _{S=A} hhhhh ^{S=C} ^G お願いましませう。S=↓
3	C	FS _{S=A} hhh ^G よろしくお願いましませう。B=↑ FN
4	A	FN _{B=↑} ^{S=↓} ね、 ^{S=B} 何でもいって、
5	B	FN _{S=C}
6	C	(1.3) ^{B=↑ S=↓} えっと、な、何を話しましょう。 ^G
7	A	
8	B	FS _t hhh どうしましょう。S=↓ FN
9	C	
10	A	とりあえず、 ^{S=C} 自己紹介 ^{FS_nh} 。 ^{FN_{nn}} ですね
11	B	そうですね。 ^{n_{S=C}}
12	C	あ、そうですね。
13	A	はい、はい ^{FS} 、どうぞ ^G
14	B	ⁿ ^{S=↓}
15	C	えっと ^{S=B} 、私の方からじゃ ^{FS_hh} 、しましょうか。

グループ1の会話の初めは、1Aから9Cまであいさつをした後、10Aで、Aが「とりあえず、自己紹介」と、互いに自己紹介をすることを提案し、BとCが同意していることが見られる。15Cを見ると、自己紹介を最初に始める人はCであるが、自己紹介の話題を提示したのはAで、この後もAは、BやCに質問をするなどして、会話を進めることになる。リーダーのような役割を担当することになったAに対して、Bは、以下のように語る。

B：すごいしっかりしてる人だなんて思って、ちゃんと話の流れも作ってくれるし、話も振ってくれるし、バランスよく、よくできる人だなんて思って、私は全部任せたので、そんな感じですかね。

会話を進めていくAに対してBが「しっかりしている」という印象を受けており、「作ってくれる」と言っている部分から、Aが会話をリードすることによって多少安心している心理状態であることが窺える。つまり、BのAに対する印象の形成は、B自身の性格の影響が少なからずあると言える。

次の会話資料2は、グループ2の会話において、Eが5Eで次の話題に進むことを提案し、8Eで次のトピックを読み上げ、11Eと14EでDとFに紙媒体の本を読んでいるか、それとも電子機器で読んでいるかについて聞く場面である。このような、Eが次の話題に進もうとしている行為に対して、DとFは、次のように振り返っている。

【会話資料2】

1	D	仕事の内容が変わる:
2	E	仕事の、内容が変わる、 ^m はい、内容が変わるだけ。
3	F	nnnnnn
4	D	(5.9) はい ^{FS} hhはい
5	E	^{FN} ま、この話ちょっと難しいからちょっと次に行っちゃいましょうか。
6	F	^{FS} hhhh
7	D	^{G FN} 本
8	E	(2.7) インターネットの発達によって本は必要なくなるか。
9	F	FN
10	D	
11	E	(1.7) みんな、どうっすか、ここって、 ^{S=D} 最近本、本で読んでます、それとも、
12	F	
13	D	^{S=E} ^{S=↓} あ:
14	E	ネット、のあの、 ^G iPadとかの、iPadとかのそれで。 ^{S=✓}
15	F	

D: ワンクッション、名前と出身と、あとなんか、ちょっとしたタイムとかあればとは思いました。でも仕切ってくれる人いないと始まらないからありがたいと思いました。(中略) いいリーダーだと思います。ちゃんとみんなの話聞いたうえで、自分の意見言って、まとめようとする、自分の意見だけで動こうとしないで、人の話もしっかりと聞く、いいリーダー。

F: Eさんは、このリスト、の質問のリストにずっと集中して、真面目の(ママ)話するけど、たとえば個人的な質問とか、君はどう思う、とか私にしか聞かないけど、私は考えたのは、この人たちちょっと知りたいと思ったので、一番大切だったのは、コミュニケーションを取る、でも他の人は、この質問に集中したと思う。(中略) Eさんは、真面目な人、ここに来て、この話のポイントを考えて、このポイントについてだけ真面目な話をした、(後略)

Dは、Eの行為について自己紹介等の時間が欲しかったと言いつつ、ありがたいと語った反面、Fは、トピックに集中することより、互いについて知ることの方がより重要だと言っており、Eに対する印象は多少否定的である。トピックに沿って会話を進めようとするEの行為は、Fにとって気が進まないものであった可能性もある。このように、DとFの意識は多少重なる部分もあるが、個人差が見られる。

5.1.2 話の内容・発話リズム・発話速度²

話の内容、発話リズム、発話速度が対人印象にどのように影響するかが窺えるのは、以下の会話資料3である。

【会話資料3】

1	A	n うん	n うん
2	B	nn うん	nn
3	C	G ¹ (1.9) なんていうか、その、G ² 漢字の↑、普通にまあ、普通の音読みが↑、	
4	A	nnnn うん	nn うん
5	B	nn S=↑N	S=C nn
6	C	ラ行から、ラ行でなっているものでも↑、ほ、冒頭に来てしまえば↑、それをナ行か	
7	A	FO B=↓へ:::面白い、FS FN	n はい
8	B	へ::	
9	C	ア行に変えてしまうという、B=↑S=↑なんかあの:、あの、S=↓修羅場とかそういう ^G	
10	A	nn あ、はい S=C1 B=↑	S=C2 nn はい
11	B	nnnn S=C1 nn うんうん	nnn S=C2
12	C	漢字の羅っていう字あるじゃないですか ^G 、あの、G ² って感じの、	
13	A	S=↓G ² これだ S=C n はい	
14	B	n	
15	C	そういう、そのラ、の字は、G ¹ もう普通に文中に入ってくると、あの、自分の	
16	A	nn はい FO あ::nn はい FN	n うん
17	B	n う:ん	
18	C	出身地:、ってあのG ² 全羅、南道っていう、ラって普通に発音するんですけど、	
19	A	n うん n FS へ:::S=↑	
20	B	ふ::ん	
21	C	それ:、を↑、G ² 頭に置くと、あのナ、S=A ¹ になってって感じですね。	
22	A	S=↓ あ、面白い、B=↓S=C あそうなんですね::、FN あ面白い。	
23	B		
24	C	S=↓	

Cは、3Cから21Cにわたって、韓国語の発音の規則について説明している。この内容は、韓国語を知らないAとBにとって難しく、また、Cの発話のパターンとしてもポーズ

が多く、発話速度もゆっくりで、慎重に言葉を選んで丁寧に説明しようとしていることがわかる。このようなCの話し方と話の内容に対して、Aは、以下のように振り返った。

Y: Cさんの印象はどうですか。

A: 真面目な方だなって思ったのは、やっぱり話の内容と、話し方ですね。なんかちょっとくだけた話題の時も、あまりあほみたいな発言もしなかったし、冗談言ったりもしない、からそうですね、真面目だなって思いましたね。

Y: その印象が出来上がるまで、身振り手振りだとか、そういう非言語のところで、影響があったんですかね、二人の行動から印象が。

A: ありますね。声の大きさとか、リアクション、話を聞いている時、話をするときのリアクション、ですね。スピードですね。ゆっくりのんびり話してる感じ。もっと活発な人だと、すごい人いるじゃないですか、何言ってるのか聞き取れないくらいすごい勢いでばーって話す人とかもいると思うので、声の大きさ、スピード、とやっぱりアクションですかね、反応、相づちの仕方。

Aは、Cの印象を「真面目」だと受けている。これは、後述する人間関係の構築としての、Aの「真面目に尽きるから、プライベートでは人間関係を続けたいと思わない」という意識と共に考えると、良い意味だとはいえない。ただし、Cは30分間、冗談を言わないで真面目な話だけをしていただけではない。それにもかかわらず、Aが上のように語ったのは、Cの声量、発話速度などのパラ言語の方が印象の形成に強く影響した結果だと考えられる。また、面白いと言っている22Aも、Cの顔ではなく胴体辺りを見ており、笑顔がなくなっていることから、思ったことを素直に言っているか疑問が生じる部分である。

5.1.3 視線

会話資料4は、FがEにAIに関する心配はないかと質問し、Eが、その質問に答える場面である。その際、Fは、一時目を逸らすすが、話し手であるEを見ながら話を聞いている。このように話し手をまっすぐ見ながら聞く行為は他の調査協力者と比べてFから多く見られる。DとEは、このようなFの視線について、素晴らしい、羨ましいと語った。

D: すごい話を聞いてくれてる姿勢でいいと思います。人の目をずっと見て話したりできる人って素晴らしいと思うので。

E: 気分はいいよね、それと羨ましい。俺もああしたいけどできないから。できなくて他のところ見てるだけで、直さなきゃって思ってる。でもなかなか直らないんだよね。

Dは、話を聞いてくれているとわかる姿勢として素晴らしいと語り、Eは、自分が話す際にFがまっすぐE自身を見ることに対して気分がよく、また、自分ができなくて羨ましいため、まっすぐ他人を見られないところが自分の直したい部分であるという。この振り返りは、相手のマルチモーダルな行為が自分の内省のきっかけになる例だといえよう。

【会話資料4】

1	D	S=F
2	E	S=F S=←
3	F	S=E FS 他の心配はありますか、AIのこと。
4	D	S=E n
5	E	やっぱり、あの、S=✓ (1.3) S=D G 大量の、あの、情報を S=F いっぺんに、あの、収集
6	F	FN
7	D	nn う:ん S=↓ S=E
8	E	できるとかするじゃないですか↑、S=✓ あの、もう、(1.1) 自分の仕事も、ちょっと S=FG
9	F	nn S=↘
10	D	nn う:ん n n
11	E	こっち系の仕事なんですけど、あの、S=✓ (1.0) S=D 中国で↑、あの、G 人の顔、
12	F	S=E Nnnn そう
13	D	n nn nn nnn う:ん
14	E	とかを、あの、S=✓ FS 個人情報を収集して、(1.0) 採集して、その個人情報、あの、
15	F	nn
16	D	n nnn
17	E	カメラに↑、なん、S=D FN 何十万人、が通ったら↑、その、あの、その人が、
18	F	
19	D	nn nn nn へ、S=↓
20	E	次の日通ったら↑、その人、あの、昨日通った人ですよってすぐ分かるって。 S=FS=✓
21	F	nn S=D S=↘

5.1.4 うなずき

うなずきは、会話の中で、聞き手が話し手の話を聞いているということが話し手に伝わる表現の一種と見られる。以下の会話資料5を見ると、Aが1Aから40Aまで自分の仕事について話しているところで、BとCがうなずきながら話に反応していることがわかる。

BとCの聞き手としての行為は、Aにそれほど積極的なものとして伝わっていなかったと見られる。Aは、Cに対しては、既に5.1.2で確認したように、話を聞く際のリアクションから真面目な印象を受けたと語り、Bに対しては、以下のような印象を受けたという。

A: 大人しい、と、あとちょっと私に気を使ってるのかなって、先輩、遠慮してる、私話さないから先輩話してくださいみたいな、もちろん言わないですけど、なんか空気を、私に対してしてるのかなって思って。

うなずきは、聞き手自身が話を聞いていることを話し手に伝える方法の一つとして考えられるが、Bにもっと話してほしいと思うAとしては、聞いていることが話さないことに

【会話資料5】

1	A	今は ⁿ 、あ、やります今度 ⁿ 、仕事 ^N 、で ⁿ 、そう ⁿ そうそう、 ^{S=} あの::、
2	B	ⁿⁿ ⁿ
3	C	ⁿⁿ ⁿⁿⁿ ^{S= ↓}
4	A	みんな入ってきて ^{S=↑ⁿ} 、(1.6) 最初、私今やってるのがベトナムと ^{S=C}
5	B	ⁿⁿⁿ うんうん
6	C	^{S=A}
7	A	インドネシア ⁿ ↑、 ^{S=↑} から↑:、日本の:、 ^{S=C} 今の病院とか、
8	B	ⁿⁿⁿ はい ⁿⁿⁿⁿ うん
9	C	ⁿⁿ あ、はい ^{S= ↓}
10	A	介護施設 ⁿ 、で ^{↑ⁿⁿ} 、働く人たち、の [↑] :、サポートを ^{S=↑} やってて [↑] : ⁿ 、
11	B	ⁿⁿⁿⁿⁿ ⁿⁿ ⁿⁿⁿⁿ
12	C	^{S=A nnnn} あ: ⁿⁿⁿ はい
13	A	でだから、えっと国で↑、ほとんど ^{S=C} の状態から、1年くらい ^{:ⁿⁿ} 、勉強して ^{S=B}
14	B	ⁿⁿ う:ん ⁿⁿ
15	C	あ:: ⁿⁿⁿⁿ ⁿⁿⁿⁿ
16	A	みんなN4レベルくらいで入ってきて↑、 ^{S=C} で1カ月くらいさらにちょっと
17	B	ⁿⁿⁿⁿⁿ
18	C	^{S= ↓ nnnnn}
19	A	勉強してもういきなりそれで、(1.4) ^{S=B} そう、病院とか、現場に、
20	B	^{FS} ⁿⁿⁿ 現場ですよ、
21	C	あ:: ^{B= ↓ G}
22	A	^{S=C} そう:: ⁿⁿ 、本当こうゼロの状態から↑、そう、 ^{S=} そう、N4レベルで来た
23	B	^{S= ↓} いや難しいな: ^{S=} 、 ^{S=A}
24	C	あ: ^{nn B= ↑ S=A} ^{S= ↓}
25	A	人たちを↑、教えて、しかも、 ^{S=} やっぱりベトナムとかインドネシアの方たち ^{S=}
26	B	^{FN}
27	C	^{S=A}
28	A	なので: ⁿ 、(1.4) もうだから、もう ^{S=B} 漢字全然分からないし発音全然違うし ^{S=Cⁿ} 、
29	B	ⁿ うん ⁿⁿ
30	C	^{S= ↓} あ::
31	A	っていうところから、もう本当 ^{S=B} あいうえおから始めて:: ^{S=} 、 ⁿ 、
32	B	^{S= ↓} す:こ:い: ^{S=A FS}
33	C	^{S=A B= ↓ FS}

つながり、Bが遠慮していると捉えたように、会話に積極的に参加しない印象を形成してしまう可能性がある」と推測される。

5.1.5 ジェスチャー

会話において、ジェスチャーはよく見られるマルチモーダルな行為である。会話資料6を見ると、Fは、3Fから18Fまで、話ながら手を動かしていることがわかる。

【会話資料6】

1	D	n	nn FS	nn	n
2	E	ⁿ はい	ⁿ はい	ⁿⁿ はい	S=✓
3	F	^G 漫画の、 ^G キャラクターの、なんか ^G 説明とか ^{Gx} 、 ⁿ うん、あれば、この、			
4	D	あ:hh ^{B=↓} nnn			
5	E	^{FS} あ:あ:あ:あ:あ:			
6	F	^G これも、 ^G 書いてあるね ^{Gx} 、だから、キャラクターは ^G どんなキャラクターか ^{Gx} 、			
7	D	あ:hh ^{nn B=↑ S=↓}		hh	
8	E	^{SO} 漫画のキャラの血液型分かんね:わ。			
9	F	それで ^G 分かるか ^{Gx} 、とか。 ^{B=↓}			
10	D	S=F FN	n	nnnn	n
11	E	S=F FN	はい	nn	
12	F	(0.8) これは、私いつも笑ったのは、セーラームーン [↑] 、から、 ^G うさぎ月野 ^x の、			
13	D	ⁿⁿ う:ん ⁿ		ⁿ	ⁿ
14	E				
15	F	^G 血液は、 ^{G S=D} O、 ^x で、 ^{S=E} なんか ^G 生まれたのは、6月30 ^G 日で [↑] 、			
16	D	あ: ^{FS} hh			
17	E	^{FS}			
18	F	^G 私と同じです。 ^{Gx} hhh			

3Fから18Fまで、Fのジェスチャーは、13回見られ、1. 右手を手前に出す、2. 右手で円を描く、3. 右手の親指と人差し指を突き出して上から下へ動かす、4. 右手の人差し指でトピックの用紙を指す、5. 右手の人差し指を突き出して左から右へ動かす、6. 右手を手前で軽く下に動かす、7. 6を繰り返す、8. 左手をF自身の左側に出す、9. 右手でトピックの用紙を指す、10. 右手の親指と人差し指で丸を作る（OKサイン）、11. 右手の人差し指でテーブルの上で横に線を引く、12. 右手の人差し指でテーブルをタッチする、13. 右手の人差し指でF自身の胸を指す、となり、キャラクターの説明の文章が目前に存在するようなジェスチャーをしている。このように、発話時にジェスチャーを多用するFに対して、DとEは、以下のように語っている。

D: 伝わりやすいなって思いますし、自分は緊張して固まってるんで、ちょっとしたジェスチャーとかがあった方が、気持ち伝わりやすいって。

E: こっちも多いから、何の意味もなくやるし、相手に分かりやすいって決まってる

わけでもないけど、癖になったから、だからああいうのを見ても特に何も感じないし、むしろ何もしない人の方が気になるよね。すごく冷たく見えるというか、そういうわけじゃないって分かってるけど、冷たく見えるんだよね。それが嫌だってことじゃないけど、ちょっと冷たく見える。冷たく見えるというよりは、落ち着いてるっていうのかな。

Fのジェスチャーの多さに対して、Dは、自分の緊張していた心理状態に基づき、発話や気持ちが伝わりやすくして良いと語る。Eは、自分もジェスチャーが多いから気にならないと言い、ジェスチャーがない方が冷たく見えるか、落ち着いて見えると言う。二人の意識から見ると、ジェスチャーは、発話はもちろん、気持ちや感情も伝えるモードとして活用できるものであり、これは、ジェスチャー以外のモードにも当てはまると考えられる。

グループ1においては、CのジェスチャーがAやBと比べて多く見られる。会話資料7を見ると、Cは、3Cから18Cまで、韓国語で頭文字の子音の表記が「ㄹ (rもしくはlのような発音の子音)」であり、その子音の発音が「ㄴ (nの発音の子音)」か「ㅇ (発音がない子音)」になる場合の規則について説明している。

【会話資料7】

1	A		はい
2	B	SJ*	S=↑
3	C	みたいなのがあって S=↓ 韓国の、 B=↓ えっと、 (1.0) G あのを、 (2.7) B=↑ G ラ行って、 Gx	
4	A	n	S=^ あ… S=C ラ行
5	B	S=C うん nn	S=^ S=C へ…
6	C	あ、	一番 G 最初の言葉として発音しづらい S=A G、なんていうか、 S=↓ なんか、
7	A	nn はい	n うん nn はい FO あ…
8	B		nn
9	C	G 話、の G 途中::で↑	G 入ったら↑、普通に S=A G 話せるけどって感じでなんか
10	A	FN n はい	n はい FO あ:: S=←
11	B		FO へ…
12	C	発音 G しやすいように↑、	G ナ行かア行に変えてしまうっていう、
13	A		へ::
14	B		FN S=↓ B=↓ だからイに変わったのか
15	C	S=↓ 現象があって Gx、 (1.6) なんか (2.3)、	
16	A	S=^	あ…
17	B	S=C	B=↑ S=↓ へ…
18	C	多分、	そこからイになったのかなっていう。

Cは発話の間、10回のジェスチャーを行っており、1. 両手の人差し指、中指をこめかみに当てる、2. 左手の手のひらに右手の人差し指でハングル「ㄹ」を書く、3. C自身

の左側で、両手で物をテーブルの上に置くように動く、4. 2を繰り返す、5. 3を繰り返す、6. 左手の親指と人差し指をテーブルに置き、右に動かす、7. 6を繰り返す、8. 左手の親指と人差し指で、F自身の左と手前で一回ずつテーブルをタッチする、9. 左手の手のひらを右手の人差し指で2回叩く（「発音しやすいように」の「し」「よ」の部分で）、10. 左手の手のひらに右手の人差し指でハングル「ㄴ (nの発音の子音)」「ㅇ (発音がない子音)」を書く、となる。このような行為について、Aは「この当時は全然思わなかったです、気にならなかったです。」といい、Bは、以下のように振り返っている。

B: そういう人なのかなと。緊張されてるのかなとは思ったんですけど、常にそういうジェスチャーをする人なのか、今回だけ多いのかは分からないので、そういう人なのかもしれないなと思って、見えました。

Aは、Cのジェスチャーについて気にしていないと語り、Bは、Cが緊張しているか、あるいは、常にジェスチャーをする人だと思い、最終的に後者だと判断した。ここから、DとEがFのジェスチャーに対して受けた印象とは異なり、ジェスチャーが必ずしも発話の理解を助けたり、いい印象を与えるものだと認識されるわけではないことがわかる。

5.1.6 姿勢

会話に参加する際の姿勢は、それを見る他の人が受ける対人印象に影響するだろうか。会話資料8を見ると、Bの姿勢の変化が見られる。Bは、Cの話を聞きながら、身体が前のめりになったり、後ろに下がったりする。このような姿勢の変化は全ての調査協力者から見られ、これについてA、B、Cに、自分の姿勢の変化に何らかの意識があるか、あるいは、他の人の姿勢についてどう思うかを聞いたところ、以下のように答えがあった。

A: 気にならないですね。とにかく、飽きてないかなって思うってことは、気になってるのかな。

B: 単純に何かが見えない時とか、あまり見えてないんで、ちゃんと見なきゃなってる時は前のめりになりますけど、話してる時だけで前のめりになるのは、何だろう。

C: 特に意識したことはないかな、基本的には、前のめりになっている方が相手にこの会話に積極的に参加している、傾聴しているということを伝えることはできると思うけど、ここでそんなに意識したことはないかも。

Aは、他人の姿勢が気にならないという。姿勢より、他の人が会話に飽きていないか心配しており、これは、最初から話題を提示しながら会話の流れを作っていたことから起因すると考えられる。BとCは、自分自身の姿勢の変化について意識していなかったと振り返る。特にCは、会話における積極性を表す行為として前のめりな姿勢があると認識しながらも、実際の会話では、姿勢に意識が届いていなかったと言う。ある行為に関する知識や情報を知っていても、その行為のことを忘れてしまっているケースである。

【会話資料 8】

1	A	ⁿ うん ヌン ⁿ うん ⁿ
2	B	ⁿⁿ ^{S=ノ} うん ^{nn S=C} ⁿⁿⁿ
3	C	けれども、韓国語の方で ^G ヌンって、発音が同じなんです、 ^{S=↓} でも、(2.2) ヌン、
4	A	ⁿⁿ はい ^{FS} hhhh ⁿⁿ ^{B=↓} あ::: ⁿⁿⁿ はい
5	B	^{S=↑} ⁿ うん ^{FS S=A} hhhh ^{S=C B=↓}
6	C	になるかヌ::ンになるか ^{S=A FS} 、で、 ^G ヌンでヌ::ン、ヌンでヌ::ン、
7	A	ⁿ はい ^{B=↑} あ::: ⁿ はい ⁿ はい あ::::
8	B	ちょっと ^{S=A} 長い ^{S=C B=↑} ^{S=↓} 難しい ⁿⁿⁿⁿ³
9	C	って感じで↑、 ^{FN} そういう感じの、長短の ^G 調整 ^{S=A} 、
10	A	ⁿ はい ⁿ はい ⁿ うん
11	B	ⁿⁿ
12	C	(0.4) ^{S=↓} で↑:まあやってるってことがまあ意識して↑、
13	A	ⁿⁿ はい ⁿⁿ はい
14	B	
15	C	まあ、あの ^{G S=A} 表記にも ^{S=↓} 現れるし↑、っていうことでちゃんと伸ばそうっていう
16	A	ⁿⁿ うん ^N あ:: ⁿ はい え::
17	B	う:ん ^{FN} ⁿⁿ ^{へ:} ^{B=↓}
18	C	意識して、学習::して:、 ^{S=A} きたら、多分そういう感じに、

5.2 人間関係の構築の意識

初対面である調査協力者6名は、会話を通じて、互いの人間関係に関してどのような意識を持つようになったらどうか。既に対人印象の意識を確認しているため、ある程度人間関係に関する意識も予想される部分があるが、6名の具体的な語りから詳しく分析する。

Y: BさんとCさんと、これから人間関係を維持したいと思いますか。

A: あまり積極的にしたいとは思わなかったりするかな、そういう機会があれば、会いたいなどは思いますけど、自分から積極的にまた会いたいとは思わなかったですね。

Y: 二人ともそうですか。

A: 二人ともそうですね。やっぱり真面目だから、そこに尽きるから。会ったとしても、またこういう話だったらいいかなって。勉強会じゃないですけど、意見交換会みたいな会だったらまた会いたいなどは思いますけど、プライベートなどところではいいのかなって。

Y: 今後とも、2人と人間関係を続けたいと思いますか。

B: もうちょっと知りたいですね、本当に30分しか話は聞けなかったの、もう

ちょっといろんな話を、聞きたいなと、あと3人で会う時と、Aさんと私が会う時と、Cさんと私が会う時と、それもまた違うので、会ってみたいと思いますけど、2人だと私のスタンスも変わるし、聞けなかったこと、聞きたいこと色々聞けると思うので、いろんなシチュエーションでいろんな話をしたいとは思っています。

Y: Bさんの印象はどうですか、会話を通じて受けた印象は。

C: 会話への参加の仕方とか、リアクションの大きさとか、リアクションの大きさに関しては当時はあまり気にしなかったけど、やっぱり、発話の比重、時間、とかを考えると、発話が多かったAさんの方が活発で社交的な印象、日本語を教える立場にあると言われて、人前に立つ仕事をする人という先入観が投影されたというか、しっかりした人だっという印象ができたかな、Bさんは、リアクションがなかったわけじゃないじゃん、会話しづらいというわけではないから、コミュニケーションには困らなかったけど、発話が少ないから、落ち着いてて静かなイメージ、ができるし、でもそんなに話が通じないという印象でもなかったから、日本語で言うとおしとやかなお嬢さんってイメージ、そういう印象を受けたかな。(後略)

Y: 二人とこれから人間関係を続けたいと思いますか。

C: いいと思う。

Aは、BやCとの人間関係において積極的な態度ではなく、それは、BとCが真面目に尽きると語る部分から窺える。また、プライベートでは真面目な話より、砕けた雰囲気での会話を好み、真面目な話をするなら勉強会のような席がいいと考えていることが窺え、その結果、BやCとの人間関係に関しては多少消極的であることが確認できる。Bは、調査で行った会話が30分だけであったため、もう少し会話をしてみたいという。また、会話の相手の人数によって会話への態度が変わることも意識し、言及している。人間関係に関して慎重な態度を示しつつ、話したいという語り、人間関係について前向きに考えていることがわかる。Cは、AとBの会話の傾向から各々の性格を推測しながらも、自分の先入観の介入を意識し、最終的には、人間関係を続けることに関して前向きに考えていることを短く示している。

Y: 今後この2人と仲良くなりたいて気持ちはありますか。

D: 気持ちはあります。自分から連絡しないので、行動に移せないんですけど。自分から連絡できないんです、色々気にしちゃうので、迷惑だったらどうしようって、だから行動に移せないんです。でも気持ちはあります、もっと話してみたいなって。

Y: もし今後この二人と人間関係を続けることができれば、そうするつもりはありますか。

E: ある。でもこういう話よりも、最近の芸能人の話とか、そういう軽い話がいいな。

Y: 2人どちらも同じ感じですか。

E: Fさんの方が気楽に話せそうな気がする。日本人と仲良くなるのが難しいなって

思ってるから。連絡しないとすぐ遠くなったりするし。

Y: この二人と30分間話して、Dさんはこういう人だなとか、Eさんはこういう人だなとか、そういう印象はありますか。

F: Eさんは、真面目な人、ここに来て、この話のポイントを考えて、このポイントについてだけ真面目な話をした、と、Dさんのことは、ちょっと日本人っぽい、静かな、あまり自分から言うことないとか、シャイかもしれないとか、日本人女性っぽい。個人的な話はあまりしなかったものでそれくらい。(後略)

Y: この二人とこれからも話したいと思いませんか。

F: 問題ないです。新しい友達作るの好きなので、話したいと思う。

Dは、EやFと人間関係を続けたいという気持ちはあるが、自分から連絡することができないといい、ここから、人間関係に関する意識に勝るDの性格の影響力が窺える。Eは、DやFとの人間関係を維持したいという意識を持ちつつ、会話の内容に関してはもう少し軽い話がいいといい、また、DよりFのほうが話しやすいと語っている。会話の内容に関する意識が見られたのはAと類似しており、人間関係の構築に関する意識においては相手による個人差があり、それは、日本人との人間関係を構築した経験も要因であると考えられる。Fは、DとEの印象として、ポイントだけ話す真面目さと、自分のことをあまり話さない日本人女性らしさを述べるが、二人との人間関係は続けたいという。これは、新しい友達を作るのが好きだと言うFのスタンスが現れており、一度の会話より、Fの普段からのスタンスのほうが、人間関係の構築や維持に強く影響することが窺える部分である。

6. 考察

以上の調査、分析した内容から、会話において様々なマルチモーダルな行為が現れ、その行為に関して各々が様々な意識を持ち、そこから、対人印象と人間関係の構築に関する意識が形成され、変容していくことがわかった。その内容をまとめると、(1) 相手のマルチモーダルな行為から対人印象を形成する際、自分の性格や会話時の心理状態が影響する。ただし、性格や心理状態には個人差があるため、一つの行為が発端になっても、各々の受け手が受ける対人印象は各々異なる可能性がある (2) 複数のマルチモーダルな行為のうち、より印象深い行為が対人印象の形成に強く影響し、印象が弱い行為は対人印象の形成に影響しない場合がある (3) 相手のマルチモーダルな行為から即座に対人印象を形成せず、様々な可能性を考えながら慎重な態度を保つことがある (4) 自分の傾向と違う他者のマルチモーダルな行為から、自分の傾向について内省することがある (5) 言語を用いないモードの活用によって、自分の気持ちや感情などが伝わることもある (6) マルチモーダルな行為は、それに関する知識や情報を知っていてもその都度認識せず、無意識に行う (あるいは行わない) ことがある (7) 肯定的・否定的な対人印象がそのまま人間関係の意識につながることもあれば、つながらない場合もあり、その際、性格、価値観などの普段のスタンスが影響する、となる。(2)と(5)、(6)から考えると、人は、意図せ

ず、相手の対人印象の形成に影響するようなマルチモーダルな行為を行うことがあり、そのため、その対人印象が自分の意図していなかったものになってしまう可能性がある。そして、その対人印象が、自分の目指す人間関係の構築に支障を来すものになり、社会を生きるにあたっての苦労などの原因になるようなものであれば、日本語を用いて社会を生きていく学習者のために、日本語教育におけるコミュニケーション及びマルチモーダルな行為の教育・学習について考える必要があるだろう。ただし、(6)を見ると、マルチモーダルな行為にどのようなものがあるかなどの知識の教育・学習と、授業での練習だけでは限界があるように考えられ、授業以外の普段の生活でもマルチモーダルな行為を意識し、行うように促す指導が必要になるだろう。

加えて、(1)と(4)、(7)から考えると、学習者が自他のマルチモーダルな行為について振り返り、話し合い、内省することが必要だと考えられる。個々人の性格や心理状態、それによって変わってくるコミュニケーションに参加する態度は、簡単に類型化して把握できるものではない。そのため、実際にコミュニケーションを経験しながら、自他のコミュニケーションに関する意識とその根底にある性格、価値観などを共有しつつ、自分のコミュニケーション及びマルチモーダルな行為などを内省し、コミュニケーションのストラテジーを考えることで、他者の理解を深めつつ、自分を表現する際の工夫をすること、また、このような活動を様々な相手と行うことで、コミュニケーションに臨む際の視野を広げていくことが必要であろう。たとえば、会話や文章のやりとりなどのコミュニケーションを行う授業において、コミュニケーションの後、どのような意識を持ってコミュニケーションに臨み、自分がどのような意識を持ってマルチモーダルな行為を駆使し、相手のどのようなマルチモーダルな行為からどのような意識を持つようになったか、コミュニケーションを通して形成された相手の対人印象はどのようなものか、また、当該のコミュニケーションに参加しなかった他の学習者はコミュニケーションを観察しながらどのような印象を受けたか、なぜそのような印象を受けたか、などを互いに話し合い、自分のコミュニケーションを内省することが必要なのではないかと考えられる。このような活動の目的は、自他のありのままの意識を完璧に表現し、理解し合うことではない。繰り返しになるが、他者のコミュニケーションに関する様々な意識と、その根底を成す性格、価値観、会話や人間関係に関するスタンスなどに触れ、他者を理解するための視野を広げ、(3)のように、他者をしっかり理解しようとする態度を持つように促すこと、また、自分のコミュニケーション及びマルチモーダルな行為に関する意識を振り返り、学習者それぞれが目指すコミュニケーション及び人間関係、そのためのマルチモーダルな行為は何かを省察してもらうことにある。

7. おわりに

前章で提案した実践において、互いに話し合う活動を含めた、コミュニケーションで行う一つひとつの行為が、全て対人印象の形成と人間関係の構築に影響する可能性を持つマルチモーダルな行為であることを学習者にも周知させ、実感させる必要があると考えられる。それは、一つのマルチモーダルな行為によって、本意や不本意を問わず、自他の対人

印象が形成され、人間関係がどうなるかが決まっていくためである。このことを、学習者に認識してもらい、単にマルチモーダルな行為ができるようになること以上に、どのようにマルチモーダルな行為を行ってコミュニケーションをしていくかを能動的に考えることが重要であることを認識してもらえ実践を行う必要がある。ただし、学習者によっては、文章や会話などを通じたコミュニケーションにおいて、他者に教えたくない、あるいは教えられない過去の経験、性格、価値観などを打ち明ける活動として捉え、負担を感じてしまう恐れがある。その際、学習者に直接会話などに参加させるのではなく、会話の映像を見ながら登場人物のコミュニケーションについて話し合うなどの活動における工夫が必要になるだろう。今後は、このような点を念頭に置き、具体的な実践を構想し、行い、改善していきたい。

注

- 1 言語・非言語コミュニケーションという用語は、言語が中心にあり、言語ではない非言語が周辺にあるという発想が窺えるが、本稿は、全てのモードを同等のものとして扱うため、以降、マルチモーダルという用語を用いる。ただし、先行研究で用いられた用語はそのまま載せる。
- 2 本稿では、発話リズムを「発話において、発話を伸ばすことや (:), 読点 (,) で表現される短いポーズの有無によって生まれる発話のテンポ」と、発話速度を「発話において音節を発音する速度」と規定する。

参考文献

- 荒川歩 (2011) 「指さし行動と発話による談話の達成」『社会言語科学』第14巻第1号, 社会言語科学会, pp.169-176
- 石井カルロス寿憲 (2015) 「音声対話中に出現するパラ言語情報と音響関連量—声質の役割に焦点を当てて—」『日本音響学会誌』第71巻9号, 日本音響学会, pp.476-483
- 岡田みさを・柳町智治 (2008) 「インストラクションの組織化—マルチモダリティと「共同注意」の観点から—」『社会言語科学』第11巻第1号, 社会言語科学会, pp.139-150
- 岡田将吾・松儀良広・中野有紀子・林佑樹・黄宏軒・高瀬裕・新田克己 (2016) 「マルチモーダル情報に基づくグループ会話におけるコミュニケーション能力の推定」『人工知能学会論文誌』31巻6号, 人工知能学会, pp.1-12
- クレス, ギュンター・R. (2018) 『マルチモダリティ—今日のコミュニケーションにせまる社会記号論の試み—』 溪水社
- 佐藤美重子 (1989) 「技術研修員のための日本語研修30時間コースへの非言語伝達導入の試み」『日本語教育』67, 日本語教育学会, pp.87-98
- ザトラウスキー, ポリー (2001) 「相互作用における非言語行動と日本語教育」『日本語教育』110, 日本語教育学会, pp.7-21
- 中川道子・石島満沙子 (1998) 「会話の上達度を計る評価基準」『北海道大学留学生センター紀要』2, 北海道大学留学生センター, pp.169-185
- 原沢伊都夫 (2005) 「日本語教師の非言語動作—学習者の視点から—」『静岡大学留学生センター紀要』第4号, 静岡大学留学センター, pp.41-51
- 福岡昌子 (2004) 「音声と非言語的情報を結びつけた聴解指導に関する基礎研究」『三重大学留学生センター紀要』6, 三重大学留学生センター, pp.41-52
- Jewitt, C. ed. (2009) *The Routledge Handbook of Multimodal Analysis*, Routledge.

- Kress, G. & Van Leeuwen, T. (2001) *Multimodal Discourse: The Modes and Media of Contemporary Communication*, Bloomsbury USA Academic.
- Norris, S. (2004) *Analyzing Multimodal Interaction: A methodological framework*, Routledge.
- O'Halloran, K. L. (2004) *Multimodal Discourse Analysis*, London: Continuum.
- O'Halloran, K. L. (2005) *Mathematical Discourse: Language, Symbolism and Visual Images*, London: Continuum.

(ゆ どんむん 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士後期課程)